



厚生白書の 「子だくさん村」

白井正夫 朝日新聞編集委員

「うちは岩手の中でも年寄り村と言われてきたのに、一夜明けたら子だくさん村になってしまった」

岩手県下閉伊郡川井村の保健婦長、大洞敦子さん(53歳)がびっくりしたのは今年6月12日のことだ。この日発表された1998年版「厚生白書」の中で川井村が「子だくさん村」として紹介されていたのだ。「子どもが4人、5人いる家が軒を並べているのですか?」。早とちりするマスコミの問い合わせ電話に応じながら、大洞さんは「国も少しオーバーだな」と思いながら、村の保健婦としてはうれしくもある1日だった。

川井村は北上山地の中央部にあり、4200人が暮らしている。盛岡と太平洋岸の宮古を結ぶJR山田線が村の中央部を東西に走っている。この列車が村を通過するのに1時間以上はかかるほどで、本州の村では4番目の広さ。林業、木炭の衰退から1960年代から過疎化に見舞われ、住民は半分に減った。いま高齢化率32%は県内でも最上位にランクされている。過疎と高齢化が同居する典型的な山村の1つだ。

この日本のどこにでもあるような川井村は、時代の最先端をいくパソコン(PC)を活用して高齢者のための医療・保健・福祉活動の「ゆいとりネットワーク」を築いた村として知られている。

村中央診療所長だった木村幸博医師(現在盛岡市で勤務医)がPC好きで独自で開発したシステムを、村が1994年

導入した。それぞれ離れている村役場、村保健センター、診療所、老人福祉施設をオンラインして、高齢者の介護記録など情報を共有し、広い村なのに「早く対応できる」ようにした。いまではヘルパーがノートPCやビデオカメラを携帯して訪問介護活動し、訪問先から映像を含めた介護状況が送られ、診療所や保健センターから適切なアドバイスができるようになった。日本で最も利用度が高く優れた在宅介護支援ネットワークと評価されている。

私も「ゆいとり」の取材で村を訪ねたことが2度ある。冬訪ねた時は、陸中川井駅の駅前にある中央診療所や川を挟んだ高台にある保健センターへ行くのに、凍った道と風雪に往生して、山村の厳しさを知った。取材目的のせいもあるが、私も「年寄り村」という思い込みだけが強く、「子だくさん」の話は知らなかった。

子育てに夢を 刺激的な白書

〇〇白書というと、お役所の作文として一般になじみの薄い存在だった。ところが、今年の厚生白書は小泉純一郎厚相が「ビシビシとくるよ」と自画自賛したように、これまでと違って刺激的だった。

白書は「少子社会を考える——子どもを産み育てることに『夢』を持てる社会を」をサブタイトルにしているように、

少子化問題を初めて主要テーマとして正面からとらえた。

昨年の全国合計特殊出生率が1.39と過去最低となり、人口を維持するために必要な2.08を大きく下回った。白書は家族や育児、結婚観、地域の子育て支援、企業風土などから少子化の原因を分析した。それも「女性が中心執筆者になって、男性中心社会をちょっと挑発的に厳しく」(6月12日付朝日新聞より)分析したのが特徴だ。

また、子どもは3歳まで常時家庭で母親が育てないと成長に影響を及ぼすという「3歳児神話」を、「根拠がない」と否定。子育てに母性が果たす役割が過度に強調されている風潮を戒めて、父親が家事・育児に参加できるよう職場優先の風土を是正、多様な保育サービスの導入を提唱している。

「読まれる工夫」をした作りで厚生白書では初めて漫画を掲載、また少子社会の閉塞を打ち破る事例をコラム、現地ルポで伝えた。「出版社辞め主夫へ転身」「シングルマザー」「子連れ同士再婚」などの事例報告の中で、川井村の「子だくさん村」も取り上げられた。

白書は約500の半分以上を第1部「少子社会を考える」に割いている。その第3章「自立した個人が連帯し合える地域の」コラム欄に「子だくさん村」が登場し、巻末の付録にルポを掲載した。白書はこう書く。

「岩手県川井村。村の合計特殊出生率が2.29と全国平均をはるかに上回る。子どもが5人、6人というのも珍しくない」

多子集落育つ 老人の川井村

これだけ読むと、川井村全体が「子だくさん」と思い違いをするが、これは11軒の集落である巖岩(ほろいわ)地区の話である。村も30年ほど前までは年間100人台の出生があったが、平成時代に入ってから25~30人を推移して、村は他の市町村と同じく少子化問題に頭を痛めている。その中で巖岩地区の話は、少子化問題と対になって言われる「子育て支援」を考えるうえで、非常に興味深い事例だと思う。

巖地区は村の西はすれにあり、村役場がある川井地区から約3km離れている。国道すじから少し入り、農家(兼業が多い)11軒が隣り合っている集落。白書にもある通り、世帯ごとの子ども(15歳未満)数は6人、5人、5人、3人、2人と並ぶ。集落の住民約50人の中で、子どもが21人もいる。

その一軒、Hさん宅(妻34歳、夫37歳)は小学校6年、4年、1年、3歳、1歳半と5人の子がいる。「年寄りいいちゃん」と呼ばれる曾祖父母、「若いばあちゃん」の祖父母も元気で、4世代11人が、2階を増築した南部曲がり家で生活する。お隣の家も子ども6人を含め4世代11人家族だ。

この数字を読んで、何でこんなに子どもが多いのか、こんなに多くの子をどう育ててできたのか、の疑問に突き当たる。

疑問に答えるように、白書はこの2軒の家の若いお母さんの話を紹介している。2人はともに「子どもの立場で考えると、兄弟姉妹は多いほどいい」と明快だ。

2人は農家の嫁として田んぼの稲や畑の野菜を作り、数頭の肉牛の世話をしている。数人の子育てとの両立は難しそうだが、これができた。白書は続く。「四世代家族は嫁としては大変だが、年寄りばあちゃんや若いばあちゃんがいて、子育てに関しては目いっぱい面倒見てもらえて大助かり」「隣同士の結びつきも強く、ちょっとした手伝いも気軽に頼み合うなどお互いを頼りにしている」。

農村共同社会の絆(きずな)ともいえる姿が見える。が、ここはもう少し説明が必要だ。

朝日新聞岩手版が昨年1月、「老いと向きあうー川井村を訪ねて」を連載した。その第1回の記事にHさんの家が書かれている。高齢者問題が主題だから、いまは90歳を超えた「年寄りいいちゃん、ばあちゃん」が記事の主役だ。薪でふるをわかつのが2人の日課と紹介して、「仕事はまだある」と書いている。

朝、息子夫婦(若いいいちゃん、ばあちゃん)が畑に、孫が出勤、ひ孫が学校へ行くと、家に残るひ孫2人の世話は



川井村の乳児検診はにぎやか(「川井村保健活動のあゆみ」より)

老夫婦の役割になる。いろいろ端でむすかる生後間もないひ孫を、年寄りいいちゃんが抱き上げて、けっこう忙しい。上のひ孫たちも、幼稚園児になるまで、老夫婦に育てられた。

支援の原点を地域社会に見た

核家族化したいまの世の中ではもう見られない「子育て支援」の原点ともいえる姿が、子だくさん家族の中に見える。

「母子衛生こそ保健婦活動の原点」という大洞さんは、村の保健婦になって30年余、さまざまな子育てを応援してきた。村内で子ども7人という家もあるが、集落ぐるみ「子だくさん」は巖地区だけである。

早くから林業構造改善事業で道路、地区水道、かん水路が整備され、比較的生活が豊かな集落である。農村社会の近隣助け合い精神も健在で、家の中では老人が孫を世話する「まごかて」と呼ばれる老いの役割がきちんと残っている。

大洞さんは地区の姿をそう説明したあと、「それより若いお母さんたちの意識が高いことがすばらしい」と話している。隣が子ども4人なら、うちもそれ位育てられると思うおおらかさがある。大勢の兄弟がけんかし、かばいあい、台所仕事を手伝い、笑いに包まれる夕食後の一家団欒。そうしたことを通して子どもたちが自立して育ってい

くことに、お母さんたちが自信をもっている。家族や隣同士の子育て支援、子どもたちの協調・自立心など、多くの子持ちになっても安心できる条件がそろっている。

子だくさん集落があっても、合計特殊出生率が全国平均を大きく上回ろうとも、村の少子化は深刻だ。住民の世代別割合は、年少者(0~14歳)9%、高齢者(65歳以上)31%といびつな形になっている。

村は少子化対策に手は打ってきた。1回6000円はかかる妊婦検診もきちんと受診して安心して出産できるよう、村の負担で受診医療券4枚を出している。また、第3子以上の出産に30万円、第5子以上に50万円を支給する「あけぼの祝い金」制度もつくった。保育でいえば、今春、村内に5か所ある保育混合型の児童館の利用を4歳から3歳に下げた。お母さんが働く環境を少しでも良くしたいからだ。だが、有効な手だてにはほど遠い、と村役場も嘆く。

子育て支援に代表される少子化問題にはどの市町村も悩む。でも私見をいうなら「巖地区に何かヒントがあるのではないですか」となる。そこには最近国や自治体という華々しい子育て支援事業はでてこないが、厚生白書がサブタイトルでうたったような「子どもを産み育てることに「夢」がある」。巖の「子だくさん」は11軒の家の個人プレーではなく、小さいながらも地域がつくり出した果実のような気がする。